

特集にあたって

蓮池 隆, 梅谷 俊治 (大阪大学)

「自分の研究成果を実務やほかの研究分野でも活かしてほしいが、どうもうまく噛み合わない。」「開発した最適化手法の良さが自分の研究領域外の方々によく伝わらない。」... 実社会のさまざまな場面で最適化手法が活用される一方、実社会の未解決問題はより複雑化、大規模化し、単一分野のみで解決できることは少なくなっている。よって、異分野の方々と共同して問題解決へ挑むことになるが、コミュニケーションのとりづらさ、感覚のずれを感じることは、どの研究者にも多かれ少なかれあるのではなからうか？誰しもが持っているこのもやもや感は、普段表に出ないことが多く、悩みを共有し、異分野・実社会との横糸を張っていくための議論の場は少ないように思える。

このような場を提供できないかという思いから、昨年の11月に関西支部が主催となってシンポジウムを開催し、異分野や企業との共同研究の経験を持つ研究者の方々に経験談や取り組みを語っていただいた。ここで講演いただいた内容は非常に多くの示唆に富み、誰しもが共感し、実は悩んでいる部分も多いテーマであることから、シンポジウムに参加できなかった多くの方々にも思いを共有していただきたいとの企画者の強い願いで、本特集を組むこととなった。

品野勇治氏には、Zuse Institute Berlin (ZIB)において仕事をするなかで、参加し、直接見聞きされてきた研究・教育活動について、最適化研究分野における数値実験を中心に詳細に執筆いただいた。日本におけるバランスのとれた良い研究環境の構築への示唆も記載されている。

武田朗子氏には、機械学習分野の研究会に参加され、成果発表されているなかで感じてこられた、最適化手法だからこそ得られる成果を出されたときのやりがいや面白さ、大変さがよく伝わり、最適化と機械学習との多くの接点を身近に感じとれる文章を執筆いただいた。

檀寛成氏には、以前勤めておられた企業での経験と現在の大学での研究者としての経験の両面から、現場の声とそれに対する提案、最適化技術が現場で力を発揮するための施策を随所で語っていただき、またそれ

を活かした檀氏の研究成果も紹介された非常に興味深い記事となっている。

羽森寛氏には、実際に中小企業で働いておられる立場から、最適化研究の実用化にあたり、産学連携の現状と課題について述べていただいた。羽森氏が関わる実例を基に、今後の学会への期待が詳細に記述され、今後の異分野コミュニケーションの参考になる部分が非常に多いであろう。

宇野毅明氏には、共同研究の実体験から、共同研究者と Win-Win の関係を構築し、互いに意義のある成果を得られるように、問題設定から負担の偏りが無いように研究を進めるコツまで幅広く紹介いただいた。研究者にとって共感する部分が多数散りばめられている文章となっている。

これら5名の方々と同列に並ぶのは恐れ多いが、僥越ながら蓮池が、これまで他分野へ顔を出してきた経験から、どんな研究者でもすぐに行える第一歩、いや第半歩としての取り組みを述べさせていただいた。大きな一歩への足がかりを感じていただければ幸いである。

本特集では、通常の機関誌特集からかなり趣向の異なる観点から記事を執筆いただいた。大きな特徴は、『研究者のサイドストーリー』の観点である。普段の研究発表会や論文では垣間見ることがなかなかできない、研究生生活の裏側を異分野コミュニケーションの観点からの執筆であり、執筆者が普段研究を続けながら、なかなか表に出せない思いがどの記事にも詰まっている。このように表に出ないことが文字として形に残ることで、執筆者の方には気苦労をおかけしたが、それでも執筆者の方々それぞれの思いが前面に出ており、非常に興味深い特集となっている。今後異分野の方々と一緒にプロジェクトを立ち上げようとされる研究者の方々、学究肌の研究者とうまく交流したいと考えておられる実務に携わるの方々、将来研究者として一花咲かせたいと考えている学生の方々、どの立場の方であっても、休憩時間にお茶でも飲みながら、少しでも多くのことを感じ取っていただければ幸いである。